

# 朝日遺跡出土のサヌカイトと 畿内式打製尖頭器についての覚え書き

大阪府教育委員会

福宜田佳男\*

## はじめに

遺跡から出てくる石器は、当時のさまざまな姿を我々に教えてくれる。ある石器の有無は、人々の生活や生業の実態を反映していると考えられる。また、石器石材には特定の産地のものを利用することが多いので、生産や流通のあり方を分析することによって、社会のしくみや集團間の交流の実態に迫ることが可能となる。このほか、石器組成や形態差から地域圏を設定したり、石器が消滅していく過程の検討により鉄器の普及を考えていくこともでき、実際に、こうした観点からさまざまな研究がおこなわれてきている。

さて、朝日遺跡の石器をみると興味深い点がある。大阪湾岸の遺跡と比較した形での見方だが、たとえば磨製石包丁がほとんど出てこないという現象は、際立った違いとして指摘できる。これについては、定型的な石包丁ではなく、剥片石器がその役割を補完していたとの見方が可能である。しかし、その数量が少ないとから、生業のあり方全体から評価しなければならないとの指摘もある(1)。いずれにしても、石包丁ひとつを取り上げただけでも、生活文化の地域色や生業のあり方にまで踏みこむことができるわけである。

その一方、大阪湾岸の遺跡との共通点として、打製石剣をはじめとする畿内式打製尖頭器の出土をあげることができる(2)。この種の石器は、畿内地域と吉備地域を中心に分布する。そうした石器が朝日

遺跡から出てくることには、どのような意味があつたのであろうか。本稿では、朝日遺跡出土の畿内式打製尖頭器とその石材であるサヌカイトをとりあげ、その実態を整理するとともに、そこから派生していく問題について私見を述べることにしたい。

## 1. 猥内式打製尖頭器について

以前、打製石槍・石剣・石戈といった打製の大型石製武器、すなわち畿内式打製尖頭器についてまとめたことがある(以下前稿とする)(3)。その後もいくつかの論考がだされており、本題に入るまえに、畿内式打製尖頭器研究の現状について簡単に整理しておきたい。

**分類** 前稿では全長を基準に形態分類をおこない、機能との相関性を考えた。

まず法量、すなわち長さと幅から

I類 幅2.5~5.0cm、全長12cm未満のもの、

II類 幅2.5~5.0cm、全長12cm以上のもの、

III類 幅5cm以上、全長12cm以上のもの、  
に分ける。これは、打製石鎌との境界を概ね全長5cmとし、それ以上のものについてグルーピングした結果である。そしてさらに平面形態によって

1類 両側辺が平行のもの、

2類 両側辺の1点に最大幅をとるところがあり、先端部および基部側に向かって幅を減じて、平面形が五角形を呈するもの、

3類 両側辺が内湾するもの、

\*現文化庁文化財保護部

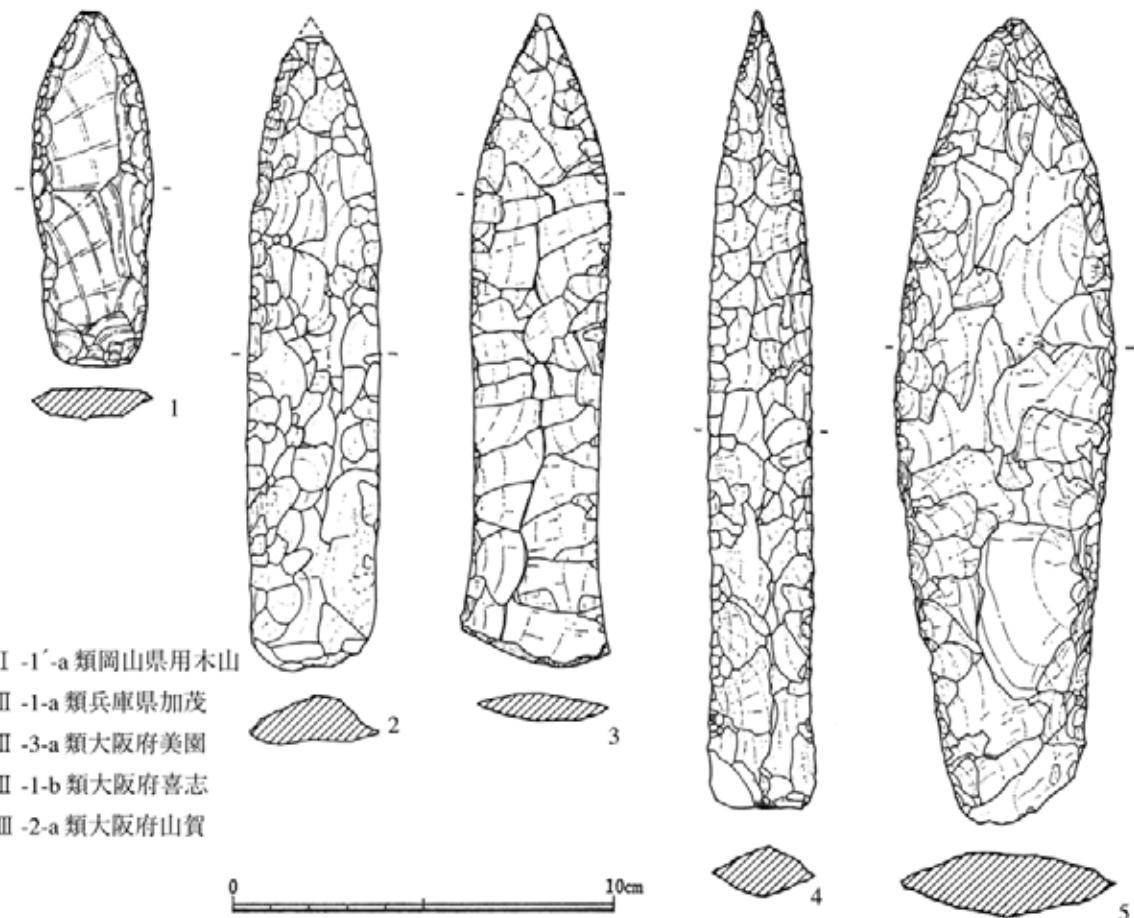


図1 畿内式打製尖頭器

とに分け、茎がついたり抉りが入るなど柄を装着するための加工がおこなわれているものを1'・2'・3'とした。

そして、さらには厚さについて、

a類 幅と厚さの比が2:1より小さく薄手のもの

b類 幅と厚さの比が2:1より大きく厚手のものとに細分した。そして、II-1-b類のように3つの要素の組合せで個々の資料を表現したのである。

平面形態が多数に分かれるのは、後述するように祖形となった磨製石剣の多様性を反映していると見られるので、さらなる検討が必要と思われる。このことは今後の課題として、以下では前稿の分類案を踏襲する。

**系譜** かつて、中村友博は畿内式磨製尖頭器の出自を中国東北部の「石鉾」に比定し、近畿や瀬戸内で打製品が出現することになった背景として、サヌカイトを利用する伝統的な石器製作技術の存在を指摘した(4)。その後村田幸子は、中村が注目した部分的に研磨された打製品の検討を通して、柄の部分の幅が刃部よりも狭くなる形の磨製石剣を畿内式打製尖頭器の祖形だとした(5)。

私も、北部九州の磨製石剣が、畿内式打製尖頭器の祖形だと考えている。しかも、さまざま形のものがモデルとなつたと捉えている。たとえば、基部に抉りの入った「石矛(木葉形尖頭器)」(6)と同形態の打製品は奈良県唐古鍵遺跡で出土しているし、大阪府山賀遺跡出土例(図1-5)もその範疇で提

えられる。また、畿内式打製尖頭器でもっとも典型的なもの、すなわち平行する直線的な側辺のものと同じ形態の磨製石剣は、北部九州地域で少ないながらも確認されており、やはり祖形となりうると考えている。そして、中村が指摘したように、北部九州のこうした磨製石剣が、東へ伝播した際の変容形として打製品が生み出されたのである。

となると、次の問題は打製化がどこでおこったのかという点である。徳島県庄・藏本遺跡では、弥生前期後半の畿内式打製尖頭器と局部磨製の畿内式打製尖頭器が出ている。前者は金山産、後者は二上山産とみられる(7)。すると、弥生前期後半の畿内式打製尖頭器は瀬戸内にも存在しており、打製化がこの地域で始まったとすることができる。この点については、いま少し、資料の増加をまちたい。

**機能** I類は基本的に槍である。そして、II類は概ね短剣だが、例外的に槍や戈であった可能性もある。III類は戈と大型の槍の両方であり、基部付近に抉りがつけば大型の槍と特定できる。これらは、蜂屋晴美が指摘していたことをもとに再整理した結果である(8)。前稿での分類の目的は、形態差に機能差を反映させることであったが、厳密に対応させることはできなかった。柄が出てこないと識別の困難な場合があるので現状では致し方ないと考えている。

また、こうした槍・剣・戈が実用であったかどうかとも、意見が分かれている大きな問題である。最近では、磨製石剣を祖形とすることで祭具としての機能を想定する見解があるし(9)、伊勢湾地方においては量が少ないとから非実用武器と考えられている(10)。また、寺前直人は、打製・磨製を問わず大型尖頭器は個人に属する武人のシンボルであったとし、これらに対して「武威器」という概念を与えていた(11)。

たしかに、畿内式打製尖頭器は暗黙のうちに実用品とされてきた点は否めない。当初儀器であった磨製石剣にしても、前期末に実用品としての性格を持

ち合わせてくる(12)。そうした磨製石剣に祖形を求める以上、儀器的な側面があったと考えるのは自然である。近年、墓の主体部から完形かそれに近いものの検出例が蓄積されつつあり、その意味を考える必要がでてきている。副葬の風習のなかった畿内地域で、畿内式打製尖頭器が墓の主体部から出土することの意味は小さくないからである。とはいものの、「武威器」として広範囲で一定の意味を持っていたのであれば、もう少し墓からの検出例があつていよいよも思う。今このことに踏み込むことはできないが、副葬の意味とも関わってくる大きな問題である(13)。畿内式打製尖頭器について、私は基本的に実用であり、そこから派生する形で儀器としての機能を有することもあったと考えているが、さらなる検討を進めていきたい。

**出現時期** 前稿では、出現時期を弥生前期後半とした。その後、前期の調査例が増える中で、確実に前期前半までさかのばるものは認められない。畿内地域に弥生文化が本格的に定着し始めた時に出現した石器、とするのが妥当と思われる。

とすると、打製石鎌の大型化の時期と一致することになる。近年ではこの現象を武器の成立以外の観点から考え直す意見が出てきている(14)。私は、打製石鎌と畿内式打製尖頭器のみならず大型磨製尖頭器もこの時期に出現することから、弥生前期後半に弥生的な石製武器のセットが完成したという点を評価したい。

**生産と流通** 大阪湾岸では、藤井寺市国府遺跡、柏原市船橋遺跡を中心とした打製石器の生産と流通の体制が成立していたと論じられている。そして、畿内式打製尖頭器については、国府・船橋遺跡とその周辺の小集落で生産された製品が、この2遺跡に集約され、大阪湾岸の他の拠点集落へ供給されたと考えられている(15)。当該地域の拠点集落では、畿内式打製尖頭器の未製品あるいはそれを製作できるような大型の素材は未発見である。当地域では、こ

れら集団が生産をおこない、ほかの集団に供給していたことは間違いないと考えている。

ただし、これらの遺跡が生産と流通を独占していたわけではないという点にも注意する必要がある。周辺では、柏原市大県遺跡でも多数の未製品が出土しており、ここも生産と流通に関与した集落と考えられるからである（16）。すると、北部九州で今山産大型蛤刃石斧が独占的に生産と流通を掌握していたという状況（17）と大阪湾岸の畿内式打製尖頭器の生産と流通のあり方とでは、社会的な意味が異っていた可能性がある。

**製作技術** そこに意図があるのかどうかはわからないが、基部に自然面を残したもののが数多くある。モノによっては基部と側刃が斜めになっている（図1、2～4）。いずれにしても、基部を加工して側刃と基部が直交し合うように仕上げないのである。弥生前期から中期前半のものには基部まで加工した例が目立つので、大きな流れとしては、基部まで調整されたものから調整が省略されたものへ、と捉えておきたい。このほか、剥離技術の詳細な観察から、厚さを減じるために鉄製工具が用いられたという意見も出されている（18）。

**分布** 先にも触れたが、畿内式打製尖頭器は岡山県を中心に東部瀬戸内地域でも出土する。ここで発見されるもののはほとんどは金山産である。形態的には二上山産よりも小型品が多く、断面形は菱形になることが多い。これらの特徴は、サヌカイト石材の性質によるものである。ちなみに金山産の製品は、神戸市の明石川流域まで分布している。

本稿では東の畿内式打製尖頭器を整理するわけだが、先に西の方の状況も簡単に見ておこう。日本海側での西限は管見の限り島根県布田遺跡である。このほかにも、古くは鳥取県上古川で採集され、近年では鳥取県青谷上寺地遺跡でも出土している。特に青谷上寺地遺跡ではまとまった数となっている。肉眼観察によると、これらの中に二上山産サヌカイト

が含まれている可能性がある。そして瀬戸内地域だが、中国地方では岡山県の百間川今谷遺跡、用木山遺跡等、四国地方では愛媛県久枝II遺跡で出土を確認している。

以上、長くなつたが、畿内式打製尖頭器についてまとめた。では本題に入ることにしよう。

## 2. 朝日遺跡のサヌカイト

**金山産サヌカイトの出土** 今回、朝日遺跡の打製石器の石材であるサヌカイトについて蛍光X線分析を実施した。これは、従来から肉眼で二上山サヌカイトと言っていたものを、自然科学的分析によって確実にすることが目的であった。また、資料抽出の際、肉眼で金山産サヌカイトと思われるものが散見されたので、それについても産地同定をおこなうことにした。

その結果、二上山サヌカイトについてはこれまでの見解を追認することとなったが、新たに金山産サヌカイトが確認された。管見のかぎり、弥生時代に金山産サヌカイトがこの地域までもたらされた例は知らず、その意味は大きい。もちろん、このことが瀬戸内地域の集団との直接的な交流の存在を示すとは限らない。時期の判明したものはいずれも中期だが、この時期だと河内では金山産はほとんどなくなるなど畿内地域でもその出土状況に差が出てくる。朝日遺跡まで、どのルートできたのかが注目される。また、もし弥生前期に特定できるものがまとまって出てくるとなると弥生文化の伝播との関わりが問題となってこよう。このように、金山産サヌカイトの出土は、朝日遺跡における文化伝播や交流といった問題に関しての新たな課題を提供したことになり、継続的な研究を望みたい。

**二上山産サヌカイト** 次に、二上山サヌカイトについて見ていくことにする。朝日遺跡における一般的な打製石器石材としては、二上山サヌカイト（安

山岩)、チャート、下呂石と泥岩があげられる。これらは器種によって使用頻度が異なっていた。

打製石鎌の場合、弥生Ⅱ～Ⅳ期における詳細な変遷が整理されているが(19)、概ね下呂石が過半数以上を占め、残りは二上山サスカイトとチャートとが拮抗している。この他の器種は肉眼観察によるが、畿内式打製尖頭器はすべてが二上山サスカイト、石小刀やスクレイバーについては、主体が二上山産であった。つまり、二上山産サスカイトがないと朝日遺跡の石器組成が成り立たない、という状況なのである。しかもここで実際に製作もおこなわれた(20)。

ところが、ほかの器種ではⅣ期に変化も見られる。二上山産サスカイトの石小刀は1点あるけれども、この時期としては珍しいとされているし、スクレイバーにいたっては、二上山産サスカイト製は認められなくなるのである。

ここで、弥生Ⅳ期について、周辺の愛知県一色青海遺跡の状況をみることにしよう(22)。打製石鎌については、33点のうち二上山産サスカイトは1点だけである。全体に対する比率は3%であり、下呂石が70%、チャートが27%となり(23)、先の朝日遺跡での状況とは大きく異なる。

2 遺跡の比較からも、朝日遺跡において二上山産サスカイトが集中的に出土する状況がわかる。このことについて石黒立人は、朝日遺跡が拠点集落であるからという解釈は短絡であるとする。すなわち、朝日遺跡周辺の集落との出土に格差がありすぎ、再分配が想定されないほど集中度が高く、朝日遺跡の集団の<嗜好>が選択の要因にあった可能性を述べている。つまり、サスカイトに価値を見いだし、石材に象徴性があったとするのである(21)。興味深い考え方である。

### 3. 朝日遺跡の畿内式打製尖頭器

概要(図2) これまでに、朝日遺跡では大小あわせて少なくとも14点の畿内式打製尖頭器が出土している。その一部を紹介しよう。

(1)は、愛知県教育委員会が調査した際に出土したものである。先端と基部が欠損しているが、中ほどにおいて幅が変わっている。その部分を境に刃部と握り部と呼び分けると、握り部の幅が狭くなっている点が特徴である。Ⅱ-2'-a類。この形に分類される例は、これまでのところ他に知らず、珍しい形態である。本例は復元刃部長は10cm前後、握りの部分も通有の場合10cm程度を測るので、復元すると全長は20cm前後と長い部類に入る可能性がある。弥生Ⅱ期。

この時の調査では、この他に小破片がいくつか出土している。ほかの器種との識別が難しいものもあるが、確実に畿内式打製尖頭器となるものは3点である。うち(2・3)は弥生Ⅱ～Ⅲ期だが、(4)は弥生Ⅲ～Ⅳ期とされる(24)。

(5)は、(財)愛知県埋蔵文化財センターが調査した際に出土した。全長12.7cm、幅3.4cm、厚さ0.8cmを測る。先端がわずかに欠損するだけではほぼ完形と言える。Ⅱ-1-a類。基部には調整が加えられて自然面は残っておらず、畿内地域の出土例を見渡しても、このような優品は少ない。基部から7.5cmの範囲は刃つぶしがおこなわれている。断面は薄手のレンズ状を呈する。弥生Ⅱ期に属する。

(6)は、先端部の破片である。先端から9.7cmが残存するが、側辺に研磨痕は確認できおらず、もともとの大きさは20cm近くになる可能性もある。幅は3.8cmと先のものよりもやや大き目である。先端部は若干非対称であるが、意識されたものではないだろう。Ⅱ類。

(7)は、基部の破片である。基部に自然面を残す。また、部分的に研磨が認められる。残存した側辺に



図2 東海以東の畿内式打製尖頭器

は、刃つぶしがおこなわれている。II-1-a類。

(8)も、基部の破片である。こちらも自然面を残すが、研磨、刃つぶしは認められなかった。II-1-a類。

(9・10)は小破片で全体の形態のわからない。剥離面には中央に向かう求心的なフィッシャーが認められることから、熱ではじけたと考えられている(25)。なお、(10)は弥生IV期とされる。

**出土の特徴** このように、朝日遺跡の畿内式打製尖頭器は、II類を基本とする。断面形も菱形でやや分厚めのものと薄手でレンズ状のものとが混在している。また、部分的に研磨の施された例も認められる。このようにII類といっても、細部において形態が異なるというのは、畿内地域の遺跡と同じ方である。そんな中で、本遺跡出土のものは精巧な作りであることが多い。破片のものを含めて、細部調

整が丁寧に施されているのである。Ⅲ期以前のものという時期的要因が関係しているのであろうか。

打製石鎌との比率をみると、愛知県教育委員会の調査例では打製石鎌453点に対して畿内式打製尖頭器4点で、その比率は113:1。(財)愛知県埋蔵文化財センターの調査例では打製石鎌約700点に対して畿内式打製尖頭器10点で、その比率は70:1、二つを合わせると、82:1という数字となる。この値が低いことは言を待たないが、近畿地方の弥生遺跡においても、三田盆地の諸遺跡のように、中期後半でも70:1と畿内式打製尖頭器の占める比率が非常に低い地域がないわけではない(26)。距離を考えた場合、朝日遺跡の畿内式打製尖頭器の出土量は少なくはないという見方もできないことはない。

興味深いのは時期である。形態が判別できる大きさのものは、いずれも弥生Ⅱ～Ⅲ期である。確実に弥生Ⅰ期のものではなく、弥生Ⅳ期にもあった可能性は否定できないが、少なくともピークは過ぎてしまっている。畿内地域において石製武器がもっとも発達するとされる弥生Ⅳ期に、朝日遺跡では畿内式打製尖頭器は衰退してしまうことになる。この意味については次で考える。

#### 4. 畿内式打製尖頭器をめぐる問題

東への広がり まず、畿内式打製尖頭器の東海以東での出土状況をみるとしよう。

愛知県域では古くから知られ西志賀貝塚で出土している。基部の破片でありⅡ-1-a類に分類される(27)。

さらに東では、静岡県浜松市の梶子北遺跡にある(28)。図2-11に示すように、先端部がわずかに欠損しているが、全長14.2cm、幅3.8cm、厚さ1.4cmを測る。中央部に鏽を作り出そうという意識が感じられる。基部には自然面が残る。側辺には5cmにわたって刃つぶしの痕跡が認められる。Ⅱ-1-a類。

また、この遺跡の周辺にある、九阪田遺跡でも基部の破片が出土している(29)。基部には自然面が残る。幅2.5cmを測り、Ⅱ-1-a類に属する。これら2点はいずれも弥生Ⅲ期である。

ここで確認した資料も弥生Ⅲ期までであり、弥生Ⅳ期まで下る例は今のところない。

畿内式打製尖頭器は浜松市域まで及んでいた。数は少ないものの浜松市域までというのは、後の銅鐸の分布などとからめると興味深い。ただし、最近調査された神奈川県中里遺跡のように畿内地域の弥生文化の影響を受けて成立した集落であれば、この種の石器が出てもおかしくないとも思える。さらに東への広がりについては、いま少し資料の蓄積をみて、評価する必要があろう。

消滅の背景 中期後半になると、朝日遺跡では二上山サヌカイト製の畿内式打製尖頭器や石小刀のように欠落するなり大幅に減少する器種が出てくる。打製石器にはひとつの転換期と言える。ところが、この時期に変化を起こすのは打製石器だけではなかった。石黒らはこうした変化を「石器組成の崩壊」と表現しているが、具体的な内容は以下のとおりである。すなわち、打製石鎌にはチャートが目立ってくることに加え、両刃石斧は完存品ではなく敲石等に転用されていること、片刃石斧は扁平片刃石斧がほとんどで柱状片刃石斧は少ないことをあげ、朝日遺跡Ⅳ-3期すなわち弥生Ⅳ期には磨製石斧の消滅という形で大きな転換期を迎えたと指摘しているのである(30)。伐採石斧の比率が減少するという状況は、畿内地域のあり方に共通する(31)。

そして、弥生Ⅳ期におけるこのような石器組成の崩壊の要因には鉄製ナイフの普及、遅れて鉄斧の普及が考えられている(32)。私自身、これまで石器組成の変化を鉄器の普及と絡ませて解釈してきたので、この意見には魅力を感じる。だが、鉄器化を議論する際、鉄器は残らないとか再利用されるので出土しなくてもよいということを理由に、石器の消滅過程

を重視する考え方に対する批判が出されている(33)。鉄器を主体にした研究と石器を主体にした研究とでは、評価に大きな差が出てきているのである。北部九州の鉄器普及量が他の地域に対して圧倒しており、その製作技術においても抜きんでていたことは否定のしようがない事実である。しかし、北部九州に比べて「貧弱」な内容であっても、その地域においては少なからぬ意味があった。鉄器の内容には地域間で格差をもちながらも、普及が始まったことを積極的に評価するというのが私の立場である。

私はこれまで、石斧の組成の変化と磨製石器と砥石の比率の変化をみてきた。朝日遺跡を中心に、この地域での様相を見てみよう(図3・4)。

まず、石斧組成についてである。この地域はすでに斧、とりわけ伐採斧が卓越する地域との評価がある(34)。時期の限定できる資料を見ていくと、弥生Ⅱ～Ⅲ期では80%、Ⅲ期単純でも60%近くと非常に高率を占めている。それが、Ⅳ期になると伐採用石斧の占める割合は確かに減少し、50%以下となっている。ただし、時期が新しくなるにつれて漸減しているとの見方もできないわけではなく、時期とともに伐採活動自体が衰退していった、という考え方もできないことはない。

次は、磨製石器に対する砥石の占める比率である。問題なのは、朝日遺跡の弥生Ⅱ～Ⅲ期において、砥石がまったくといっていいほど検出されていないことで、新たな課題が出てきたことになる。いずれにしても、弥生Ⅱ～Ⅲ期で砥石を確認したのは阿弥陀寺遺跡の1点だけなので、弥生Ⅳ期に砥石の出土数が増えてくると、その比率は当然高くなってしまうわけだが、ここでは、この事実を確認しておきたい。

つまり、弥生Ⅳ期には、大型蛤刃石斧の減少傾向がいっそう進むとともに、砥石の出土量が増え一定の比率を占めるようになったのである。こうしたこととも、この時期にみられる石器組成の特徴として石黒らの指摘事項に追加したい。そして、その背景と

して、鉄器の普及を考えている。Ⅱ～Ⅲ期に砥石がほとんどなく磨製石器の刃部の調整をどうしていたかという問題は残るが、Ⅳ期の砥石の増加には、これまでとは違う対象物すなわち鉄器の存在を想定しているのである。

尾張の凹線文土器の成立において深く関与していたのは畿内地域でなく、近江を介しての日本海側地域であったという見解がある(35)。また、滋賀県熊野本遺跡は琵琶湖の北西に所在するが、弥生Ⅳ期に数多くの鉄器が発見されている。琵琶湖が東海地域への鉄の道としての役割を果たしていた可能性が示唆されるのである(36)。

二上山サヌカイトの供給についても、弥生Ⅳ期に新たな幹線道路とでも言うべき近江からのルートが重要な意味をもつようになり、その結果、大和からの供給にも変化がおこった。新たなルートができるも、従来からのルートが途絶することはなかったが、二次的な性格のものに変化したことは想像に難くない。実は、この時期、明石川や三田盆地でも、二上山サヌカイトの供給に変化が認められる(37)。弥生Ⅳ期には、既存の石器生産、あるいは流通のシステムに変化がおこった地域がある。その要因には、鉄器が普及しはじめしたことによる社会的な関係の変化があったのだと私は考えている。

## おわりに

朝日遺跡をはじめとする尾張地域のⅢ期からⅣ期における石器組成や二上山サヌカイトの供給の変化には、鉄器の普及による新たな交流関係の成立が原因であったと考えた。そんななか、畿内式打製尖頭器も消滅の方向に向かった。もし畿内式打製尖頭器が、朝日遺跡において特殊な意味を持っていたのであれば、Ⅳ期になんでも出土していいように思う。特に、朝日遺跡の集団が二上山サヌカイトに強い、<嗜好>を持っていたとするのであればなおさらである。が、そうはならなかった。すると、畿内式

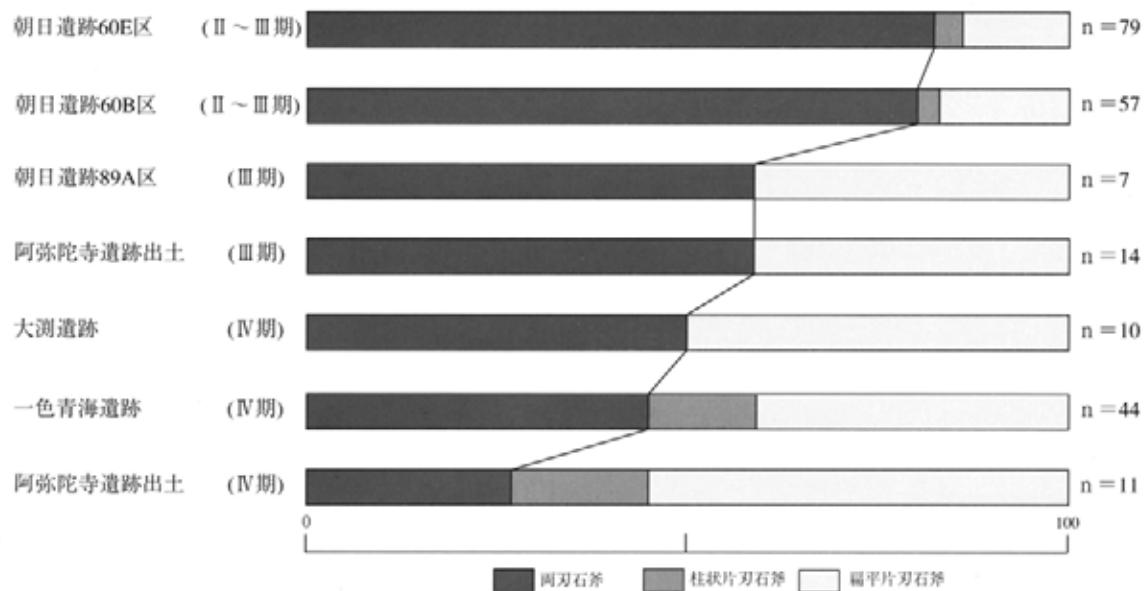


図3 石斧組成

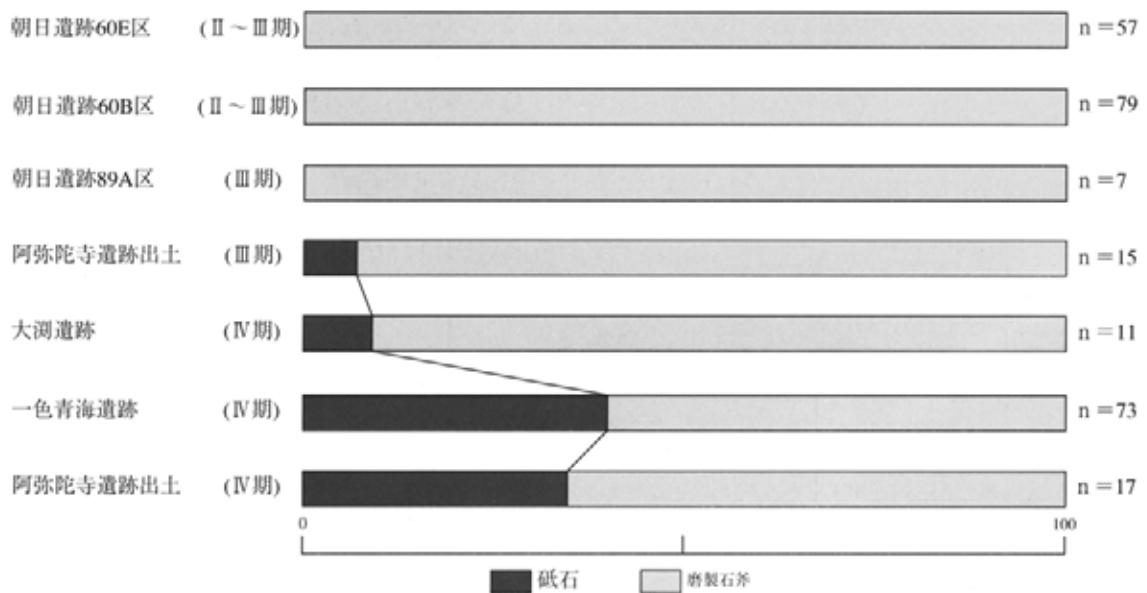


図4 砥石と磨製石斧の比率

打製尖頭器自体に特別な意味はなかったことになる。朝日遺跡のサヌカイトと畿内式打製尖頭器について述べてきたが、積み残した問題は多い。今後の課題としたい。

#### 註

- (1) 石黒立人「石器群の予備的考察」『朝日遺跡』IV (財) 愛知県埋蔵文化財センター 1993
- (2) 猥内式打製尖頭器に、木の葉形のものは含めていない。ただし、小型のI-1-a類、第1図1などもこの名称に含めて考えている。
- (3) 櫻宜田佳男「打製短剣・石槍・石戈」『弥生文化の研究』9 雄山閣出版 1989
- (4) 中村友博「弥生時代の武器形木製品『東大阪市遺跡保護調査会年報 1979年度』」1980
- (5) 村田幸子「『打製石剣』—畿内式打製尖頭器—の成立をめぐる問題」『みずほ』第25号 大和弥生文化の会 1998
- (6) 下條信行「石矛の提唱—木の葉形磨製石製武器について」『賀川光夫先生還暦記念論集』 1982
- (7) 橋本達也「徳島における弥生時代の戦争とムラ・墓・まつり」『庄・藏本遺跡』1 徳島大学埋蔵文化財調査室 1998
- (8) 蜂屋晴美「終末期石器の性格とその社会」『藤沢一夫先生古稀記念 古文化論叢』1983
- (9) 註5文献
- (10) 石黒立人「手工業生産と弥生社会をめぐるラフスケッチ—伊勢湾地方を中心にして」『考古学フォーラム』8 1997
- (11) 寺前直人「弥生時代の武器形石器」『考古学研究』第45卷第2号 1998
- (12) 長沼孝「磨製石剣・磨製石戈」『弥生文化の研究』9 雄山閣出版 1989
- (13) 櫻宜田佳男「生産経済民の副葬行為 弥生文化」『季刊考古学』第70号 雄山閣出版 2000
- (14) 村田幸子「縄文晩期から弥生前期における近江の石器—石鎌の地域性を中心に—」『畠中誠治教授退官記念論集 近江歴史・考古論集』1996・神野恵「弥生の弓矢」『弥生時代の人・社会・風土』文部省科学研究費古人骨と動物遺存体に関する総合研究シンポジウム実行委員会 2000
- (15) 註8文献
- (16) 塚田良道「弥生時代における二上山サヌカイトの獲得と石器生産」『古代学研究』122号 1990
- (17) 下條信行「石器の製作と技術」『古代史発掘』4編作の始まり 講談社 1975
- (18) 栗田薰「打製石剣の製作技術」『弥生文化博物館研究報告』第4集 1995
- (19) 堀木真美子・式部真木「一色青海遺跡出土の石器石材について」『一色青海遺跡』自然科学・考察編 1998
- (20) 註10文献
- (21) 註10文献
- (22) (財) 愛知県埋蔵文化財センター『一色青海遺跡』1998
- (23) 註19文献
- (24) 愛知県教育委員会『朝日遺跡』I 1982
- (25) (財) 愛知県埋蔵文化財センター『朝日遺跡』IV 1993
- (26) 櫻宜田佳男「有鼻遺跡における弥生石器の諸問題」『三田市北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』IV 兵庫県教育委員会 1999
- (27) 紅村弘『東海の先史遺跡』総括編 1963
- (28) (財) 浜松市文化協会『梶子北遺跡』遺物編(図版) 1998
- (29) 浜松市博物館鈴木一有氏のご好意により実見させていただいた。
- (30) 石黒立人・堀木真美子・五藤そのみ「朝日遺跡の弥生石器をめぐって」『朝日遺跡』V (財) 愛知県埋蔵文化財センター 1994
- (31) 櫻宜田佳男「近畿地方の石斧の鉄器化」『弥生文化博物館研究報告』第1集 1992
- (32) 石黒立人・原田幹 「石製品」『一色青海遺跡』(財) 愛知県埋蔵文化財センター 1998
- (33) 村上恭通「倭人と鉄の考古学」青木書店 1999
- (34) 酒井龍一「初期農耕開拓活動の諸形態」『文化財学報』第7集 奈良大学文学部文化財学科 1989
- (35) 深沢芳樹「尾張における四線紋出現の経緯—朝日遺跡の土器の検討から—」『朝日遺跡』V 1994
- (36) 芦屋市教育委員会森岡秀氏のご教示による。
- (37) 註26文献